

## [資料] 海はひとの母である (抄)

安里 成信

【解説】これは「金武(きん)湾を守る会」の世話人の一人で、同会の精神的支柱だった故安里成信(あさと・せいしん、1913~1982)さんの聞き書き『海はひとの母である 沖縄金武湾から 安里成信』(晶文社、1981年初版刊)の第1章である。

「守る会」は、三菱石油が金武湾を埋め立ててCTS(石油備蓄基地)を建設することに反対して「復帰」の翌年(1973年)結成された、同湾沿岸住民の運動である。

日米両政府は金武湾の北東側にある同じ東海岸の名護市辺野古の海を埋め立てて、巨大な米海兵隊基地を建設しようとしているが、海を殺すことは沖縄人の 生存の根 を絶つことだと訴え続けた安里さんの思想は今こそ広く継承されるべきと思い、ここに収録する。

本書は1978年から80年にかけて井上澄夫と津野海太郎がおこなったインタビューをまとめたものであるが、残念なことにすでに絶版である。(井上澄夫)

### 名波松吉さんのこと

いま吹いている風をミーニシ(新北風)といいます。秋口から冬になるころに吹き荒れる風ですね。向こうにミーニシに揺らいでフクギ(沖縄で防風のため家の周囲に植える木)が四本立っているのが見える。あの家のおじいさんが八月十四日に交通事故で亡くなった。名波松吉(なは・まつきち)さん。だがこの辺では名波さんとはいわない。ナーヤグワーヌオジーというんだな。からだの小さな、隣り近所の子もたちからも大変したしまれていた人です。そのおじいさんが亡くなった。七十四歳でした。

名波さんはあの家に、甥にあたる山根健一といっしょに住んでいた。もう四十歳を越しておるんですけど、全盲同様の目の不自由な甥です。だから洗濯とか炊事とかお風呂とか、いっさいの面倒をこのおじいさんが見ていたわけです。

ここに坐って眺めていますと、おじいさんはいつもハチマキを前にしめて、リヤカーをひきまして、そのリヤカーに健一君がすがって、二人がリヤカーの人となって出ていくのが見える。おじいさんが「ケンイチー」と大きな声をだす。すると健一君が「ヌーヨー」と答える。「なんだい」という意味だな。この

やりとりが朝と晩、こちらにずっと聞こえよった。その声を聞き、そのうしろ姿を見るといこうと、私は、もう神のような人だと思ったですね。目の不自由な甥をつれて、毎日、畑の土の人となる。そして自分の生産したものを自分一人で処理してしまうということはしない。隣近所に分け与えて、あまったものを減らしていくという人だった。

健一君の祖父にあたる方は、たいへん三線(サンシン・三味線)の弾ける人でした。だから健一君もサンシンがほしいほしいといつもいうておった。名波さんにはサトウキビの収入とか、健一君が肢体不自由のために、ちょっとした年金みたいなものがあつたんだね。それを貯蓄しておいて健一君にサンシンを買ってやるというのが、名波さんのひとつの大きな望みだったんです。

この人が非常に残念な死に方をした。事故が起きた場所は、照間(てるま)と屋慶名(やけな)のあいだに狭い道路があるでしょう、県道三十七号線ですけれども、あそこは朝になるといって石油基地建設のために車が混雑するところなんです。それにひっかかった。朝早く、いつものように健一君をリヤカーにのせて県道三十七号線にさしかかるところで、車に突っかけられて、レントゲン撮った結果は内臓の破裂。それなのに現在にいた

るまで犯人もわからないのです。

名波さんはこの六年間のCTSの闘いを、一度も欠かしたことがない。名波さんが属していたのは兼久（かねく）班という班で、班というのは行政の末端組織ですけれども、兼久班は三十六戸ぐらいある。この三十六戸をもってユイ（結）というものをつくっているわけです。サトウキビの伐採や搬入もユイでままとめてやる。名波松吉さんは那覇武盛（なは・ぶせい）さんや兼久慶寿（かねく・けいじゅ）さんとともに、この兼久班の長老三羽鳥のひとりだったんだ。キビの刈り取り作業というのは非常に苦しい作業ですけれども、この方たちがたえず先頭に立っているものですから、若いアンマター（おばさんたち）も負けちゃならないということで一所懸命やる。

それから農業研究クラブというのがあります。この農研クラブで名波さんが研究しておったものは玉ネギですね。沖縄では玉ネギはヤマト（日本）のものを買っているわけですが、これをなんとか自力で生産すべきだということで、一所懸命に研究をやっていた。だから「ナーヤグワヌオジーの玉ネギ」といったら、もう屋慶名ではひとつの銘柄になっていました。この人の玉ネギならどこの店でも買ってくれる。そのことがこの人の誇りでしたね。

農研クラブの活動とむすびついて、かりゆし会（老人会）の農産物展示会があります。年一回、今年も十二月の二十八日にやりますが、名波さんはその審査員で、これまで自分の作物もたくさん出していました。目の不自由な健一君を畑につれて行って、ワタ虫がつかないようにサトウキビの葉っぱをはぐというような、健一君にもできるかんたんな仕事を手つだわせながら、土のなかに生涯を埋めつくすようにして働いておった。しかもそれだけにとどまらず、ハーリー（旧の五月四日の海神祭に行なう爬竜船の競漕）、綱引き（旧の六月十五日）、ウスデーク（旧の七月十五日に行なう女の盆踊り）といった伝統行事なども、いつも先頭に立ってやりましたね。

名波さんは小学校をでたきりで、貧困のためにどこの学校にもいっていない。しかし、平板測量につかうトランシットというのがありますね、あれの名人で、同僚からトランシッ

トなら名波さんといわれるほど技術のすぐれた人だった。その技術でもって南洋にいったわけです。長男をここに残していったのですけれども、向こうで娘二人と次男が生まれた。そして第二次大戦中、奥さんを亡くしまして、小さな娘たちを胸と背中に帯でしっかり結びつけて、男の子の手をひっぱって南洋から脱出してきたわけです。そういう苦（にが）い戦争体験をもっているからこそ、目の不自由な甥をかかえていても、それを守るだけで精一杯ということにならずに、多彩な社会的活動をやることができたんでしょう。CTSの闘いについても、そこには二度と国策の犠牲になっちゃいかんというつよい魂がはいっていた、と私は思います。

人前でベラベラしゃべっているようなわれわれとちがって、この人は六年間、じっと目を据えつけて見ていた。裁判の動き、それから「県」に対して行動したときも知事や幹部たちの動き、それを目を据えつけて見ていた。その偉容といえますか、じつにすばらしかった。

亡くなる三日前にも名波さんはここにやってきて、「ディッカ」と声をかけてくれたんです。「いこう」とか「でかけよう」という意味の誘いの言葉です。ちょうどその日に、平安座（へんざ）島のガルフ石油で高圧水素ガスのパイプライン破裂事故があったでしょう、その事故の模様を立ち入り検査した村会議員さんたちから聞くために、自治会館で世話人会が開かれることになっていた。だから「ディッカ」というのも、私はそこにいこうという意味だと思った。ところが門をでて右にいこうとすると、かれは左にいこうとするんだな。そして「マーカイヤクトウ（どこへいくんだ）」というもんだから、「事故の模様を聞きにいくんだよ」と答えると、「今日はモアイだよ」というんで、あっと思った。農業研究クラブのモアイ（寄り合い）に誘ってくれていたわけです。そこで別れたんですね、右と左に。結局、それが最後の別れになりました。

干潟の生命力

名波さんは海をたいへん大事にしました

ね。農業の合間にはよく海にいて、それからこの部屋にやってきて、自分たちが生きてきた根っこは海なんだ、「ヤケナヌメーヌハマ（屋敷名の前の浜）は絶対に売らしてはならん。最後まで闘うんだ」と、いつも私にいいきかせていた。

屋敷名の長老たちは名波さんだけでなく、みな海を大事にしています。この方たちの父親や母親もそうだった。昔は潮のぐあいを見て、この付近一帯のおばあさんたちがつれだつて海にいきよつた。モリをかついでね。それと水鏡。あとは大きなザルを背負って、裾をまくりあげて、三十人ぐらいがいっしょにいきよつた。そして、海人草というのがありますね、サントニン（回虫駆除薬）の原料になるあれを採ってきて、庭に干して業者に売る。それがひとつの生活の手段になりよつた。ウニとかカニとか貝なども採った。それをここでは「海アサリ」といいます。

名波さんの家のうしろに那覇武盛さんという方が住んでいる。兼久班の長老三羽鳥のひとりですね。この方はいまでも牛を養っている。きのうも牛をだしてきて散歩せしめていました。

一九七四年の一月十九日に、当時の屋良知事が「CTSは誘致しない」という声明をだして、そのあと、われわれは「県」の土木部にいきました。土木部はすでにシーバース（海上棧橋）を許可して、それを工事せしめていた。で、「誘致しない」というのはウソの声明ではないかと土木部に抗議した。安里土木部長という人だったけれども、この人がはね返すように「CTSは公害は出ないんだ」といいたわけね。そのとき那覇武盛さんが、「私は八十になるまで子どものときから牛を養っている。毎日、牛を海につれていって水浴びさせる。そのときに牛が潮水を飲む。ところがCTSがつくられだしてから、牛は潮水に見むきもしない。これはどういうことなんだ」と、武盛さんは日本語が使えないので、ウチナーグチ（沖縄語）で突いていった。土木部長はがっかりして、返す言葉もなくいたわけですが、あのときのことを私は忘れることができません。

こういった人たちが「県」や国と闘ってきたことのうちには、自分と海とはひとつだと

いう感じがあるわけですね。自分は海で育ってきた。「海」という字を「人の母」というように解釈する人もいますが、私は当然だと感じますね。さっきの「海アサリ」の話のつぎになりますが、私もここに生まれて育つたんで、ひもじければ海にいけばよかった。手ぶらで海に行くでしょ。そして踵（かかと）で砂をグリグリやると、車エビがでてくる。車エビが眼玉ひからせて、群をなして砂のなかから湧いてくるんだな。あんまり沢山でくるんで、恐ろしくなって逃げてきたこともあるぐらいです。それをそのまま生んで食べてしまう。

潮が引きますと、逃げおくれた魚や砂にもぐって棲息する生物が、くぼみにたまって。それをハマヒルガオの蔓でつくった縄でかこいこんで、ひっぱってくる。旧暦六月十五日の大綱引きも、このハマヒルガオでスタートするんだ。五月に入ると、子どもたちがハマヒルガオをあつめて綱をつくる。ハマヒルガオの綱引きからはじまって、つぎがニーサーハイヤーといって青年の綱引きです。そのころから稲ワラができてきますので、青年たちが各民家からすこしずつワラを貰って、ハイヤーをつくる。ハイヤーは綱のことです。ニーサーハイヤーは、夜、東西のニーサー（青年）たちが、肉体をぶっつけて心ゆくまで押し合う。そのあとで綱を引く。こうしてだんだん盛りあがったところで、ようやく大綱引きになる。

干潟は子どもにとってはもってこいの遊び場です。砂の上で駆け足をしてると大きい紋甲イカの打ちよせられたのがいる。鯨もよく流れてきましたね。そして潮が満つと、こんどは水泳をする。水のなかで眼を開いていると、砂地で活動を開始したカニが見えますから、追って行って足で押える。もぐってそれをつかまえる。家にもちかえることもあるが、大体はそこで食べちゃったな。本当に、新鮮なものばかり食べてきた。それほどゆたかな干潟だったわけですが、それがみなCTSによって失われてしまった。

旧の三月三日にはハマウリー（浜降り）という行事があります。婦人たちの穢れをはらう日。同時に海難事故で亡くなった人の追悼をおこないます。

このハマウリーというのは非常に盛大でしてね、屋慶名の前の浜に三千人も人があつまって、ヌンクーグワー（小さな鍋）で貝や磯のものを炊く。海が人を呼ぶんですね。石油基地がくる前は、この家から海まで三百メートルくらいしかないわけですから、私も夕飯を食べてからすぐ懐中電燈ひとつもってでかけよった。暗いなかで人の声があっちこちで聞こえる。那覇のことばが聞こえるし、沖縄市のことば、内間（うちま）や平安名（へんな）のことばが聞こえる。いたるところから来ていることがよくわかりますね。そして、どこからいらっしゃったのかというようなことで、交流がおこなわれる。健康を回復するためにきている人もおりますし、人生のなかにあるいろんな寂しさを晴らしにくるとか、あるいは若い人たちが いまはデートというのかな、そんな関係できている者もいる。だから、海というものはすべての人を育てる大きな役割をもっているなあということが、そこでよくわかりましたね。人の母ですね、海は。

干潟は生態系のエネルギーの集積所なんだということですね。東京水産大学の片田実さんが書いた本を続いでわかったんですが、この砂地で大きくなった車エビが外洋にでて、そこで孵化した小さなやつがまたこの砂にもどってきて大きくなる。その繰り返しのあいだに、大きな魚に食われながら自然が維持されていく。きのう食べたタマン（フエフキダイ）など、この車エビなどを食って生きたものでしょうし、白イカのお腹のなかにも小さなエビが入っているんだな。つまり金武（きん）湾は白イカ漁の本場だったんです。戦後になってからも、よくおじさんたちにくっついて浜にいて、白イカを網でかこいこんだりしたもんです。

このあたりの家は一軒ごとにみな網をもってたんじゃないかな。たとえばスクガラス（アイゴの稚魚）ですね、これは旧の四月二十九日から二日間くらいしかこないんです。これを四月スークといいます。その生態学的な意味は私にもまだわからないんですが、それ以外は全然とれない。これが珊瑚礁の草をよく食うんです。するとクサアマーといって、草の色がついて味がわるくなる。値打ちがなく

なるんだな。四月二十九日 この日は毎年  
のことでわかってるから、みんな見張っているわけね。見ているうちに海の色が変わってくる。「スークドゥーイ！」とだれかが叫ぶ。みんなすくい網をもって駆け足でやってきて、すくっていく。ほとんどの家庭がそれで一年分の蛋白源を手に入れることができた。チクラマチなどもそういったところから、海の行事として生まれてきたんだと思うんです。

チクラマチというのは屋慶名に古くから伝わっている集団の棒術ですね。チクラというのはボラの稚魚のことです。以前は年に一度、ボラが川をのぼってきて産卵した。そのチクラを村の人たちが総出でつかまえて、屋根の上にひろげて天日で干した。このときチクラがピョンピョンはねながら渦をまくでしょう。その渦まきをまねてチクラマチが生まれたといわれています。百何十人かの若衆が屋慶名大通りの東と西にわかれて、白装束にタスキをかけ、棒を手にして待ちかまえてると、ホラの音がひびく。両軍が旗持ちを先頭に太鼓の音にあわせて行進していくと、ちょうど大通りのまんなかでぶつかるわけですね。そこで渦をまき、また二手にわかれてもとのところに戻り、また行進してきてぶつかり渦をまく。それがチクラマチです。私たちの祖先はチクラを貴重な蛋白源として食べるだけではなく、そこからすばらしい伝統的な文化をつくりだした。偉大な祖先だと思いますね。

ところがこのチクラマチが昭和三年の「大遊び」以来、ずっととだえていた。不況と戦争のせいだね。これをわれわれ「かりゆし会」の手で復活させようということになったんです。一九七七年のはじめですか、昭和三年のチクラマチにくわわった二人のおじいさん

八十八歳の伊計武太さんと八十七歳の桑江松信さんをたずねて、一か月間、高校生を中心にして猛練習をやりました。そして一九七八年の十月、私の母 安里ウサのカジマヤーの祝いにあわせて盛大に復活させた。カジマヤーというのは風車の意味で、九十七歳の祝いですね。「風車は風でまわるが、私は孫や曾孫につれられてまわる」という意味の歌をうたって、村の八つの橋をまわって、白寿をむかえる老人がもういちど子供の気特になって人生のスタートを切るというのがカジマヤー。

誘致派の連中もふくめて、六千人の村人のほぼ全員があつまつたんじゃないかな、道ばたでチクラマチを見物していた人たちを入れれば。金の話がからむと人間はおかしくなる。おかしくならぬ主体をつくりあげるためにはどうしても文化が必要なんだということですね。

この辺の海図を見ると「ウラムトウの海」とありますが、こちらでは「宝の海」というように解釈している。ウラは浦、ムトウはモト、元手、資本ということですからね。それほど生物の生態系のバランスがとれていたのに、それがひとつひとつ潰されていって、生活のすべてに影響がでてくる。七月のお盆にやるウスデークという婦人たちの踊りがありまして、そのなかにこういう歌があります。

ヘンザウラドゥマイ  
ウシタティティハシラ  
ヤケナウラドゥマイ  
ヒツユマディハシラ

(平安座浦の港を帆を押したてて走っている。  
屋敷名浦の港から世の果てまで走っていこう)

古くからこう歌われているということのうち文化の根があり、海を大事にしなければならないという考え方の根っこがある。その根っこを忘れてしまうから、近代石油文明に汚されて、世の果てる世界をつくりだしてしまうんじゃないだろうか。

平安座島にはナンジャ岩という岩があります。ナンジャというのは銀という意味です。そしてあの一帯の海を浜比嘉島をはじめ島々の漁民たちはジングラといっている。ジングラというのはお金の蔵 　いわゆる金庫だな。ある浜比嘉島のおじいさんなどは、海は銀行だったといってる。というのはね、戦争で家が焼けたでしょう。その家を再建するのに、海で魚を得るとすぐに漁業組合に入れて、そのお金で材木を買ったんです。都会の人のように銀行から借りて家を建てるという方式じゃなくて、海を銀行にして家を建てた。だから三菱から金を得ようなどと、ぼくらは毛頭考えない。海が銀行なんで、三菱が銀行なんじゃないとみんな考えています。

## 海を歩く人たち

ここは干潟ですが、海にでると久高(くたか)島から津堅(つけん)島、浮原(うきはる)島、浜比嘉(はまひが)島、伊計(いけい)島と、裾礁(きょしょう)であると同時に干(ひ)出しの珊瑚が連綿とつながっていきます。干出しになると一般の人でも海アサリをやりますが、特にこの珊瑚礁に依存しているのは漁民ですね。

沖縄東海岸の漁業のほぼ九〇パーセントが、これらの珊瑚礁に棲む魚を対象にした沿岸漁業です。のこりの十パーセントぐらいが遠洋にでる。特に最近では二百カイリ問題などがでてきたもので、「県」も沿岸漁業の見なおしということで、モズクの養殖なんかにも眼をつけはじめているようです。なんでも巨大化して、大きな船で外洋にいけばいいというのではなく、こちらでは自給自足 　まず自分たちのための漁獲を得ることが基本なんだ。したがって船も小さい。沿岸漁業すなわち零細漁業で、くり舟(サバニ)を中心とする漁業です。普通は二人でやっていますね。しかし対象とする魚によっては、一人でやる人もいます。たとえば白イカだと、一人で擬似餌をつかってやっています。もうすこし沖にでてスルメイカをとる場合は二人でしょう。

しかし、くり舟は沿岸専門かというところではなく、薩摩の支配時代以前にはマラッカ附近までいっています。漁民のことをこちらではウミアッチャーという。海を歩く人という意味です。何隻かのくり舟で船団を組み、どこまでも海を歩いて、マラッカ海峡にまでいったんでしょうな。そういう人はいまでもいるわけね。原告団に入っていた浜川さん

この人などもマラッカにいて、モリで大きな魚をとっていた。とった魚は向こうでさばいたんでしょうね。

いまは漁業権が設定されて、ウミアッチャーたちも小さなところに閉じこめられているんですが、もともとは海に線引きなんかできないわけですから、津堅島の漁民たちも慶良間(けらま)にいたり宮古にいたりしていた。いまのように巨大な漁船団で乱獲をするのではなく、人間の寸法にあった漁業をやっていたら、漁業権を設定する必要はない。だ

から沖縄には漁業権はいらんという声も大分つよいようです。昔は津堅の人が糸満で漁民としてきたえられたりしていた。糸満の漁民といったら世界的な潜りの達人ですからね。都市の人たちのように隣り近所も知らんというのではなく、金武湾の漁民は沖縄全体の漁民、糸満の漁民とたがいに知りあっていたんです。

糸満の人たちの方も、冬になると向こうは時化（しけ）がつよいから、こちらにきまして、浮原島という無人島に小屋をつくって、そこを生活の拠点とする。夏になっても海浜で亀の卵をとったりとか、季節によって移動して、一年中漁業をやっていたんです。どこが危険で、どこにいったらどの魚がとれるかをちゃんと知っていた。

ウミアッチャーの足はくり舟　これは非常に安定した舟なんです。ひっくり返っても自分で起こして、乗りなおせる。つかまっていればどこまでもいける。津堅のハーリー舟などは、十二人くらいは乗れるかね。それでもって沖までずっと漕いでいき、わざとひっくり返して、それをまた起こして漕いでくる。その競漕です。いついかなるところで生きて帰れるという自信があった。ところがエンジンがついてから、その自信がなくなった。エンジンがついているということは、沈む可能性があるということだからね。海を歩くのも陸を歩くことと同じように安全なんだという自信がなくなった。ぼくらが子どものころに、この一帯に鯉の罐詰工場ができたんです。それである親子が鯉を大量にとろうというんで、大型の漁船をつくったんだ。ところが海難にあって二人とも死んでしまった。それから海は危険なところだという考え方ができてしまったんで、くり舟でやっていけば屁でもなかったんです。

鯉といえば、伊計島はイチガツとって鯉の名所だった。金武湾の入口から入ってくる鯉を、網を自然に仕掛けておいて三〇〇〇キロぐらいとっていた。それを向こうでは部落全体で処分するんだ。三分の二が漁民のものになって、三分の一の売上げ金を子供たちの教育などにつかうということで部落におさめてね。それも石油基地ができてからはだんだんに消えてしまった。

平安座島は漁業もやりましたが、交易をさかんにやりましたね。昔の家は茅（かや）ぶきでしょう。その茅を国頭（くにがみ）から伝馬船で屋慶名の浜にはこんできてさばく。サトウキビや黒砂糖をつくるための燃料も向こうからはこんできました。それから牛奄美大島あたりからやせた牛やまずい牛を買ってきて、それを屋慶名で売っていた。トウクヌシマー（徳之島牛）とか与論牛というのがそれなんだ。これを屋慶名で闘牛用に育てあげた。屋慶名は沖縄きっての牛どころだったんです。砂糖車もひきますけど、やっぱり闘牛用が主でした。そして闘牛のときには仲買人がきていて、負けた牛はすぐに食肉用にだしてしまっただけで、だから那覇の港からヤマトに向かう船には、かならず牛がのっていました。これが阪神で売られるいわゆる神戸牛というやつ。沖縄の牛を神戸牛としている。青い草を食べているから、肉質がいい。こういった自然にできた流通機構をそれなりに整理していけば、農業行政もきちっとしたものになる。ところが行政がなくなってないものだから、牛の値段も上がったたり下がったりで大変なのです。

宮城島は土地が広いだけに農業にもかなり依存していける。しかし桃原（とうばる）のあたりには漁船もかなりあるし、まだ漁業もさかんです。でも、やっぱり外洋の方にでていかざるをえないでしょうね。

それから津堅島についていえば、沖縄の漁民たちのうちの圧倒的な多数が東海岸に集中している、その東海岸漁業の一大拠点が津堅です。だから津堅の漁民が滅びるのは東海岸の、ひいては沖縄の漁民が滅びると同じことだといってよろしい。あそこにも大きな干潟がある。それは、台風があろうがなにがあろうが、そこにいけば生活ができるという拠点を、すぐ眼前にもっているということですね。以前は海岸にザルをおいてね、一日中、モズクをとりよったわけです。養殖じゃないです。そのほかにもギブグワ（シャコ貝）とか、シジリンナという赤い色をした、ポタンなんかつくれる巻貝などがさかんにとれたところ。そして、島のまわりには豊富に魚がいる。トビイカ（スルメイカ）でもなんでも豊富にとれる世界なんだ。漁民たちの気風

にも非常に剛気なところがありますが、それも物質的な生活基盤がしっかりしていたからでしょう。ところがその津堅島の漁業もCTSによって危殆に瀕している。この島のまわりは、島の面積の五、六倍はある広大な珊瑚礁なんです。われわれの調査によると、それが全滅しているんですよ。この島には日本軍の要塞があったから、以前の戦争のときは米軍の艦砲射撃でめった撃ちされたんです。それでもこれだけ海が殺されるということはなかった。

海中道路の問題はいま非常に大きな問題になってしまったわけですが、一九七〇年前後のことですから、もう九年か十年めになります。これは村議会の側からすると「離島苦の解消をめざす」ということだったんですが、潮の流れをくいとめてしまったために屋慶名にとっては村の浮沈にかかわる問題になってきた。はじめ議会で決めたコースというのは、平安座から藪地をへて屋慶名につながる道だったんです。以前からそれが平安座に行く適切な歩き道だった。そこの潮の流れるところには橋を架ける、珊瑚礁が隆起しているところは道にするという計画で、これは議会でも決議しておったわけです。ところがこの案にガルフ石油が難色を示しまして、企業にとって便利で、安上がりな、つまり現在の海中道路のコースを示してきた。これではいかんということで、五百人ぐらいの部落の人が当時の琉球政府に陳情に行ったわけですね。約半年間。しかし企業側が金を出すわけであるし、災害の心配はないということで押しきられ、さらに「不安解消」ということで十萬ドルを村の方にくれまして、村議会もこれを承認してしまったといういきさつがあります。

いまもいったように、ぼくらはこの海をウラムトウの海と呼んでいたわけですが、そこから一帯の砂を全部かきよせまして、潮が引いたときに道路予定地にどんどん埋めていった。そしてその上に勝連（かつれん）の山を壊した石を積んで、アスファルトを敷いたのです。およそ一年八か月の工期を予定していたわけですが、それが三十五日間で仕上がってしまった。非常に粗雑な作りだということがわかつて、そうして、この海中道路には

橋を三つ作るということで村が妥協したんですけれど、いま橋はひとつしかない。あと二つはどうなったかという暗渠（あんきょ）なんですね。その暗渠もいますっかり埋まってしまっている。だから潮はたった一本の橋の下をながれているだけということになっています。当時は海に対する認識だとか開発による自然破壊だとかいう考えは非常に弱くて、今日これだけの破壊をもたらす結果になるということなどはほとんど知られていなかった。「県」も基地経済からの脱却ということ、自然環境の変貌ということよりも優先して動いたわけですね。その結果として、油汚染が出ましても湾内で停滞するとか、潮の流れが全然なくなって、滞留型の金武湾にかわってしまった。つまり潮の流れというのは海が生きていることの証拠なんです。その海の動脈を断ち切ってしまったのですから、病気の状態の金武湾になってしまったのは当然なんです。

海の生物というのは潮の流れと切っても切れない関係にある。その潮の流れがかわったものだから、たとえばさっきの津堅島でも漁獲高が大幅に減った。しかもあそこは砂でしょう。流されやすいんです。じわりじわりと侵食がすすんでいる。ウニも、以前は海辺にあるのを好きなだけひろって食べれるくらいでしたが、いまはほとんど見えない。また照間の方では白イカが定置網に卵を産んでいるんです。以前、ダイバーたちといっしょに調べたときもそうでしたが、本来はホンダワラに産むのです。そのホンダワラがないものですから、藻場を失なって、定置網が産卵所になる。網になるといって、このあいだの時化みたいにしこし風がつかよくなると、卵がみな浮いてくるわけね。このあいだは、網からはずれて流れている白イカの卵を、船にいっぱいとってきているんだ。海岸にうち寄せられると、これはもう駄目になります。

石油基地をつくるために六十四万坪の埋立てをする。そのために八十三万坪の珊瑚を砕いて土砂をとる。潮流がかわって島が削られるというだけでなく、海底から泥がもえあがって、その泥がまわりの珊瑚を窒息せしめる。珊瑚は虫なんですからね。そしてそのあげくは生態系のバランスを失なって、オニヒトデ



が発生する。油汚染に泥汚染がかさなって、沖縄人の生きていく基盤をぶちこわしていくそれが金武湾の現状です。

ここの自然というのは、裾礁や干潟が多いだけに、海になったり陸になったりする微妙な自然でしょう。珊瑚がこの沖縄の国をつくってきた。浜比嘉島の西にミルチピシというところがある。珊瑚礁は虫によって隆起していきますから、あそこも将来はひとつの大きな島になる可能性があります。そのようにして成長していく海だということがわかります。珊瑚をだいじにすると、島がふえるんです。非常に大事な珊瑚　しかも国土造成という面だけではなくして、魚があつまってきた棲みつく魚礁なんですから。景観の上からいっても珊瑚は見事なんだな。珊瑚が生えているところになりますというと、二メートル以上、この天井ぐらいの高さまで海底から生えているわけです。これはちょっと想像がつかないでしょう。それが根こそぎなくなっている。オニヒトデにさんざんやられて、白骨化していくんですからね。だからおそろしい。沖縄の生存の根が絶やされていくような感じでね。国頭の森林を米軍が軍事演習でぶちこわしたのと同じように、海底森林　私はそういうように表現するわけですが、それをC T Sがぶちこわした。

そしてタンカーやガルフのC T Sがたびたび油汚染事故をおこして、その度にガムレン（中和剤）をバラまいたことが、決定的に海を殺していったと思うんですね。そのうえ、石川市付近の海洋博に関連した大きな開発がありまして、その赤土がどんどん金武湾に流れこむ。魚が減るのは当然です。村がつくった統計から見ただけでも、毎年水産業が停滞していくようすがわかります。漁網は進歩したのを使うわけですが、にもかかわらず漁獲高が減るということ、そこに海の破壊の大きな証拠があると思うんですね。照間の漁民など、かつては一日に朝夕二回魚を揚げるという盛大さだったのが、一日一回に減り、現在では三日に一ぺんしか行かない。浜比嘉の漁民たちも、いまでは魚は断念しているという恰好です。

このように生存の根が破壊されて、七十人あまりいた浜比嘉島の漁民もごくわずかな数

になってしまった。海にたよって生きてきた島々の人たちが、たちまち「棄民」ということになるわけです。出稼ぎにいった流民化したり、やむをえず他の漁区に入って、密告で海上保安庁に逮捕されたりしてね。そこまで漁民たちは追い込まれてしまった。ところが行政も司法も、これだけの珊瑚を殺して、沖縄の運命にかかわるような根こそぎの破壊をしている者には知らんぷりしている。通産省にしても、ここの海から久高島までの五十三キロの長さ、それから横軸を浜比嘉島から十何キロかあって、水理模型実験をした結果、この一帯で埋立てをしても潮流の変化はないなどといっている。国土地理院などは、埋立てによって国土が大きくなったといってるんですけど、かんじんの珊瑚虫を埋立てによって窒息せしめてしまえば、虫がつくっていく未来の国土を失なうということになりますので、これは当たらない。治山、治水ということばがありますが、こういうところではやっぱり「治海」ということが必要です。

「県」もあわてて対策をたてて、人工魚礁を金武湾に入れたりしたようですが、すぐ埋もれてしまっている。無駄なことなんですね。なにしろ久高島から伊計島、メングイ礁にいたる天然魚礁としての珊瑚は　それだけの面積のものは何千年かかってもつくりきれませんからね。それを活かすことに尽力しないで、それを潰して人工魚礁をつくらうなんて愚かさはね、こうした行政のあり方はとても許されるものではないね。

